

# 総合学習（文化領域）

乗 富 章 子	興 井 綾 子
森 田 誠	邑 井 吉 治
小 西 裕 一	釣 本 直 行
草 鹿 万 里	沢 野 景 子

## 1 領域の目標

文化領域では、全体論の総合学習でめざす「共に生きていく社会や環境に自らの活動を通して働きかけ 新たな自分、自信の持てる自分を創っていくこと」に迫るため、以下の目標をたて具体化していくことにした。

身近な文化のよさにふれることで 豊かな生き方をしようとする態度を育む

「文化」ということばが意味するところは、辞書にその意味を尋ねても「人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称。衣食住を初め技術・学問・芸術・道徳・宗教など物心両面にわたる生活形成の様式と内容とを含む」（広辞苑 新村出編 岩波書店）とあるように、実に幅広く、人々の生活に深くかかわっているものである。しかし、日々の生活に有形無形の影響を与えているにもかかわらず、身近にあるが故に、その「文化」のよさに気づかずにいることが多いように思われる。

そこで、文化領域では、改めて意識して身近にある「文化」に十分ふれたり、浸ったりすることで、その「よさ」に気づいたり心の豊かさを感じたりすることができるのではないかと考えた。そして、その気づきや感得したことが、日々の生活の中に、余裕をもって物事を見たり、価値あるものに出合ったとき素直に感動したり、他の者の感じ方や考え方や行動を尊重したりすることのできる自分を見い出していくことにつながると考え、上記の目標を設定した。

## 2 活動を構成するにあたって

### (1) 取り上げた視点について

上記の目標を達成するには、身近な文化に十分ふれたり浸ったりするとともに、文化を見たり考えたりするときの視点づくりが必要であると考えた。なぜなら、身近であるが故に、その「よさ」に気づかずにいることが多い、文化に対する見方・考え方のもとになるものだからである。例えばそれは、日本の文化に大きな影響を与えている気候風土、地域性、歴史、伝承、行事、季節感、人々の知恵や思い、宗教などである。これらの視点をもって様々な文化を見れば、そのよさに気づくことができるであろう。

そこで、昨年度までの実践をふまえ、文化の「よさ」にふれ、気づかせていくためのものとして、本年度は身近な文化、とりわけ「金沢」の伝統文化を中心に取り上げることにした。

本校が位置する「金沢」は、伝統文化が今も息づく街と言われるが、それは決して特定の芸能や美術が守られていることだけを意味するのではない。季節によって色彩や味付けを変化させていく和菓子や、原材料や水に恵まれまた冬の寒さや降雪が育み、加賀百万石時代から保護、振興が図られてきた美術工芸や芸能などが、さり気なく毎日の生活の中にとけ込んでいることにある。本単元で扱う具体的な内容については、別に掲載する年間計画で詳しく述べるが、金沢の伝統文化にかかわる「もの・こと・ひと」にふれ、あるいは浸り、自らもつくってみたりすることで、前述の通り、身近な文化のよさや、毎日の生活にも深くかかわっていることに気づいていくものと考えている。そして、この活動の経験が、さまざまな文化にふれるときの自分なりの見方のもととなること、つまり視点づくりになることを期待している。

## (2) 学びを広げ深めるために

全体論では総合学習の単元を構想していくときに、①体験的活動を取り入れる ②学びの個性化を推進する ③学びの個性化に合わせて環境を整備することの3つを留意点としてあげている。

そこで文化領域では、それぞれを次のように考えて単元を構想することにした。

### ① 体験的活動を取り入れるについて

文化領域の体験的活動では、特に子どもが文化に十分にふれたり浸ったりできることを大切に考えている。本物にふれ、本物の雰囲気味わうことが、人間として文化のよさや心の豊かさを感じながら生きることや、文化を尊重する心や態度の育成につながると考えるからである。

そこで視覚・聴覚・味覚など五感を働かせたり、物を創ったりするような本物にふれる活動、本物の雰囲気を十分味わう活動を取り入れていきたい。

また、本物にふれさせていくために、全員が共通の体験的活動を行う場を設けていく。文化領域で取り上げる文化に対する子どものかかわりは、子ども一人一人異なっている。そこで、取り上げる文化のもつ独自の様式、形式に従って共通の体験的活動を行うことが、その文化に対する子ども一人一人の自分なりの思いをふくらませ、新たな体験的活動へとつながり、自分にとって意味ある活動へ広がったり深まったりすると考えている。

この点に留意した活動が十分に行える場や時間の保障をしていきたい。

### ② 学びの個性化を推進するについて

一つの文化のよさにふれたり浸ったりした子どもは、その子なりの思いをもってその文化へいろいろなアプローチをしたいと考えるであろう。また、その文化から触発された問題意識にもかなりの広がりが見られるであろう。それは、これまでその文化に接した経験の有無や深さに関係しているからである。したがって、子ども一人一人が追求する問題を解決していく方法においても同様のことが言える。このような子ども一人一人の追求する問題の個性化と解決する方法の個性化を保障・推進する単元を構想していきたい。またその際、子どもたちが意見交換できる相互交流の場を重視しつつ設定していきたい。

### ③ 学びの個性化に合わせて学習環境を整備するについて

文化領域で扱うことやものについて、子どもが自分の持った問題を解決するには、学校図書館にある書籍や教師集団だけでは十分に対応できない。そこで、まずゲスト・ティーチャーとして、文化にかかわる各界の専門家、外国人留学生、メール・ティーチャー（金沢大学の教官など）、文化活動に携わる保護者や地域の人々などの人材をフルに活用していく必要がある。また、参考図書、各種ビデオ、インターネット情報の閲覧整備などとともに、学校近くの児童会館や市立図書館などの施設の利用やそれを利用する時間も確保していきたいと考えている。